文献紹介

平岡昭利　編
『地図で読み解く日本の地域変貌』
海青社　2008年11月　333頁　3,048円＋税

本書は日本各地から以下に示す111か所の地域を選定し，旧版地形図と現行地形図とを比較することを通して，地域の変貌を読み解いたものである。

北海道　札幌，函館，苫小牧，室蘭，余市，旭川，富良野，稚内，帯広，釧路，標茶
東　北　仙台，盛岡，青森，八戸，秋田，八郎潟干拓地，山形，酒田，福島，郡山，いわき（小名浜）
関　東　東京，八王子，多摩ニュータウン，横浜，川崎，相模原，横須賀，三宅島，千葉，浦安，松戸，九十九里浜，さいたま，川口，水戸，つくば，石岡，日立，鹿島臨海工業地域，宇都宮，前橋，高崎
中　部　名古屋，一宮，豊田，豊橋，岐阜，浜松，静岡，甲府，長野，岡谷，軽井沢，新潟，長岡，富山，高岡，黒部川扇状地，砺波平野，金沢，福井
近　畿　大阪，堺，大和川，東大阪・大東，千里丘陵，枚方，神戸，西宮，姫路，京都，大津，奈良，天理，和歌山，津，四日市
中国・四国　広島，呉，福山，岡山，児島湾干拓地，倉敷，水島工業地帯，山口，下関，鳥取，松江，高松，徳島，鳴門，松山，高知
九　州　福岡，北九州，久留米，佐賀，有明海，長崎，佐世保，大分，熊本，宮崎，鹿児島，桜島，那覇，沖縄，与勝諸島，南大東島

111の地域は都道府県庁所在地をはじめとする主要都市のほか，とくに著しい変貌を遂げた地域が選ばれている。これらのうち，北海道の屯田兵村や九十九里浜，黒部川扇状地や砺波平野，児島湾干拓地や有明海など，近世・近代日本の歴史地理を語る上で，欠くことのできない地域を網羅していることは論を俟たないが，これらに加え，多摩ニュータウンや千里丘陵，鹿島臨海工業地域や水島工業地域，八郎潟干拓地など，住宅都市や工業地域の形成，大規模農地の造成など，戦後日本の地域変化を示す格好の事例も数多く含まれている。

本書の編者は，『地図で読む百年』シリーズ（古今書院刊，全10巻）の編者でもある平岡昭利氏である。各事例地域の解説は，編者を含めた86名によって分担されているが，いずれも，その地域にあって教鞭を執ったり，その地域を研究対象としているなど，個々の地域に深く関わり，熟知した地理学者が担当している。本書は，全10巻に及ぶ前書から事例地域を厳選し，いくつかの地域を新たに加えた上で，記述内容を必要最小限に簡略にして1冊にまとめたという点で，前書の「ダイジェスト版」とみなすこともできる。しかしながら，これを単なる「ダイジェスト版」とするのは，いささか早計であろう。なぜなら，本書には以下のような，工夫が凝らされているからである。

一点目は，現行地形図として世界測地系移行後に発行された，最新の地形図を使用するばかりでなく，2001年から2003年にかけて柏書房から『正式二万分一地形図集成』が復刻されたことに即応して，多くの都市で，旧版地形図として，この「正式二万分一地形図」が採用されていることである。具体的には，仙台，八王子，横浜，浦安，川口，前橋，高崎，岐阜，甲府，富山，高岡，福井，大阪，姫路，大津，奈良，天理，和歌山，津，呉，岡山，山口，下関，鳥取，高松，鳴門，松山，高知，久留米，佐賀，長崎，佐世保，熊本がこれに該当する。これは，我々が比較的手に取りやすい，『日本列島二万五千分の一地図集成』シリーズ（科学書院発行，全５冊）に所収されている図版よりも，大縮尺であることに加え，図版の印刷状態も良好なものが多い。そのため，上記の事例地域については，近代都市として変容を遂げつつも，江戸時代の名残を色濃くとどめていた，20世紀初頭の諸都市の形態や内部構造を，とくに明瞭に読み取ることができる。

二点目は，1,000語を超えるキーワードからなる索引が充実している点である。個々のキーワードには，固有名詞など，該当箇所が1地域のみのものも少なくない。しかしながら，該当箇所が多いキーワードの存在により，複数の地域に共通する地域変貌のキーワードが浮かび上がってくる。個々の地域の歴史的基盤を示すものとしては，城下町や宿場町，新田・新田開発など，また比較的新しい時代の地域変化を示すものとしては，工業都市・工業地帯・工業団地，中心市街地・中心商店街，空洞化，架橋，インターチェンジ，区画整理事業などがこれにあたる。

この索引に散りばめられたキーワードを手がかりにすれば，本書を単に111の地域を列挙した地誌書として読むばかりでなく，読者のレベルや関心に応じて，系統地理学的に読みを深めていくことが可能になるであろう。評者は，編者が「はしがき」において，本書を「『考える地理』への基本的書物」と位置づけた意図が，この点に反映されているように思えてならない。もとより，個々の執筆者の記述スタイルは，執筆者の個性や事例地域の特性に応じて様々であるから，本書の複数の地域を単に読み比べるだけでは，読者の欲求を即座に充たしてはくれないであろう。しかし，この点に関して，読者が物足りなさを感じたとするならば，そこにこそ読者が本書をきっかけに見識を深めるべく，自学する余地が残されていると考えるべきであろう。

本書で取り上げられた個々の地域変貌誌を読み，高度経済成長期が現在へと繋がる「大変貌期」であったことを，改めて思い知らされる。昨今の大学生はもとより，これから教壇に立とうとする評者らの世代の地理学徒もまた，この「大変貌期」の後に生まれ育ち，変貌前の状況や変貌の過程を経験していない。歴史地理学が「過去」の地理を研究対象とする学問分野であることを踏まえれば，高度経済成長期は言うに及ばず，それ以降に生起している地域変化もまた，歴史地理学が取り組むべき課題の範疇に入りつつあるといえる。地域変貌という現象を人に説明したり，その意味を考えたりするにあたり，評者らの世代は，その変貌を肌で感じてきた世代に及ぶべくもない。しかしながら，そうであるからこそ，表象された地域の様態を記号化し，国土領域を網羅した地形図は，景観写真や映像資料などと同様もしくはそれ以上に，その良き手がかりとなるであろう。本書は，歴史地理学を学び，考える上で興味深い日本全国の事例を網羅し，しかも，そのエッセンスを1冊の中に凝縮させた書物であり，それでいて価格設定はリーズナブルである。歴史地理学徒にとって「必携」の書物として，本書を紹介したい。

（清水克志）